

## コメント

橋川健竜

私はご報告いただいた四つのペーパーを題材に、三つの話をさせていただきます。第一は太平洋におけるグローバリゼーション、第二に帝国、第三にオーストラリアのアイデンティティです。その中で、ご報告の先生方に質問を差し上げたく思います。

第一に、太平洋におけるグローバリゼーションを特徴付けします。私は歴史屋ですので、グローバリゼーションは何度も、波のように来たと考えたいと思います。最初の波は18世紀の後半から19世紀の前半です。まとめるなら、探検と異文化間交易の時代であり、そしてその異文化間交易が、市場経済に取って代わられる時代といえます。探検についてはおそらく語る必要はないでしょう。ラッコの毛皮の取引は、先住民がラッコを捕えて、イギリス人やアメリカ人と取引するのであり、文化の異なる集団が手探りで交易している点で、すでに異文化間交易です。さらに、本日あまり出てきていない中国を加えると、ますます異文化間交易になります。当時の中国における対外交易は、今日では朝貢システムと呼ばれています。これは経済的な取引ではなく、中国こそが中心にあり、それ以外はすべて外縁にあるということ、モノの取引を通じて確認する、外交的な儀礼なのです。イギリスも当初はこれに合わせて取引することを余儀なくされましたが、中国から茶を大量に輸入していたこともあって、それに対応する輸出をしようと、1840年に有名なアヘン戦争を起こし、朝貢システムの解体に踏み出していくことになります。ここでオーストラリアについて補足しますと、オーストラリアも1800年から1820年ごろにかけて、アザラシの毛皮の取引を中国と行っていました。ただしこれは、アザラシの数が減ってしまったため、20年ほどしか続きませんでした。以上が一つ目の時代です。

二つ目は19世紀の真ん中から、20世紀の真ん中あたりまでの時代です。この時代の特徴は、人の移動と、それに対する反応です。この時期の初めに、カリフォルニアとオーストラリアで、数年の差でゴールドラッシュが起こります。1851年にオーストラリアで金が出るというニュースを広めたのはエドワード・ハーグレイヴズという人物ですが、彼はカリフォルニアで金を掘っていたことがありました。その後オーストラリアに戻り、地形的に似た場所について勘を働かせたのです。彼は太平洋をまたぐ人物だったわけです。さらに、ニュースを聞いて金を掘りに来た数多くの人々の中には、中国出身者も含まれていました。カリフォルニアには1860年代末に約6万3,000人が、オーストラリアには1880年にかけて4万人ほどの中国出身者が来ており、顕著な人の移動が起きていたのです。これに対して、アメリカでもオーストラリアでも反発が起きます。アメリカでは1882年に排華移民法を制定して、中国人の入国を禁じました。オーストラリアは1901年に連邦を結成した際、いわゆる白豪主義政策を完成させます。ですから太平洋的に同じことが起こっており、しかも敷衍するなら、オーストラリアはアジアの国々を恐れて、イギリス海軍に守ってもらうことを望んだと考えることができるでしょう。

三つ目は20世紀の後半から今日にかけてです。情報が瞬時に伝わり、文化が商品として世界中で共有される時代です。この時代については、ベル先生とカーター先生が詳しく

お話をいただきましたので、私が話を重ねる必要はないでしょう。オーストラリアにとって、アメリカはもはや脅威ではありません。イギリスはもはや権威ではありません。どちらも、圧倒的な帝國的な存在ではないのです。グローバリゼーションの波について、以上のようにまとめたいと思います。

このように考えると、二つ目のトピックである帝国は、大雑把な物言いですが、恐れというものと結びついていることに思い至ります。オーストラリアがアジアの国々を恐れていたということは、先ほど申し上げました。アメリカがルイスとクラークを派遣した理由は、イギリスを恐れていたからです。アメリカ自身も誰かを恐れて帝國的という行動をとらねばならなかった、と考えてもよいでしょう。ここでテイラー先生に、ジェファソンに関する質問を差し上げます。ジェファソンは、彼をどう理解するか次第でアメリカ史全体の評価が変わってしまう人物です。特にジェファソンと商業、陸、海などの関係の扱い方が、大きな解釈の違いにつながります。テイラー先生のお話では、ジェファソンは海や商業と強く結びついていたことになりそうです。他方我々は多くの場合、ジェファソンを陸の人、農業を好んだ人とする通説に従ってアメリカ史を学んできました。この見解の違いについて、整理をしていただけると幸いです。

三つ目のトピック、オーストラリアのアイデンティティに話を移します。2000年シドニー・オリンピックの開会式では、オーストラリアのアイデンティティがひとつの商品として提示されていました。そこでは解放的で誰も排除されない感じがします。誰でも楽しく消費できる商品であり、恐れという感覚を引き起こさない、そんな風に見受けました。これはおそらく、オーストラリアが自分に対する自信を強めてきたことの現われなのだろうと思います。特に、外部からの影響力に対して、それに自分たちが対応でき、消化できるという自信を持つ、いうなれば柔軟で、かつ安定したアイデンティティを持つにいたったということでしょう。多文化社会を注意深く作り上げてきたオーストラリアの近年の歴史の、なすところなのかもしれません。ここでベル先生とカーター先生に質問を差し上げます。消費志向の柔軟かつ安定したアイデンティティは、とても魅力的なものです。しかし消費志向という点を考えると、それは、あくまで気が向いたら手に取ってみるものである、といった印象を私は禁じ得ません。もう少し強い思い入れやこだわりの場所はないのでしょうか。たとえば、粘り強く自分の国を改革していこうという意思是、消費志向のアイデンティティから起こってくるのでしょうか。キーティング首相のことが思い浮かびます。1990年代にキーティング首相はアジア地域とのつながりを積極的に求め、国内では多文化主義を推進しました。しかしそれはポピュリスティックな反発を呼び起こし、彼は選挙で敗北します。取って代わったのは保守的なジョン・ハワード政権であり、加えてワン・ネーション党という、さらに保守色の濃厚な政党が出現して注目を集める、ということすら起きました。ポストモダンで消費志向の自己理解をする社会では、改革を推し進めることは難しいのだとも考えるのですが、先生方はこの点をいかがお考えでしょうか。

最後に福島先生にひとつ質問を差し上げます。incrementalism, すなわち漸進的に成果を追求する、という言葉が先生は使われました。これを、ベル先生とカーター先生が示唆される消費志向のオーストラリアのアイデンティティと関係させて説明することは可能でしょうか。難しい質問で恐縮ですが、ご意見を伺えれば幸いです。私からは以上です。ありがとうございました。